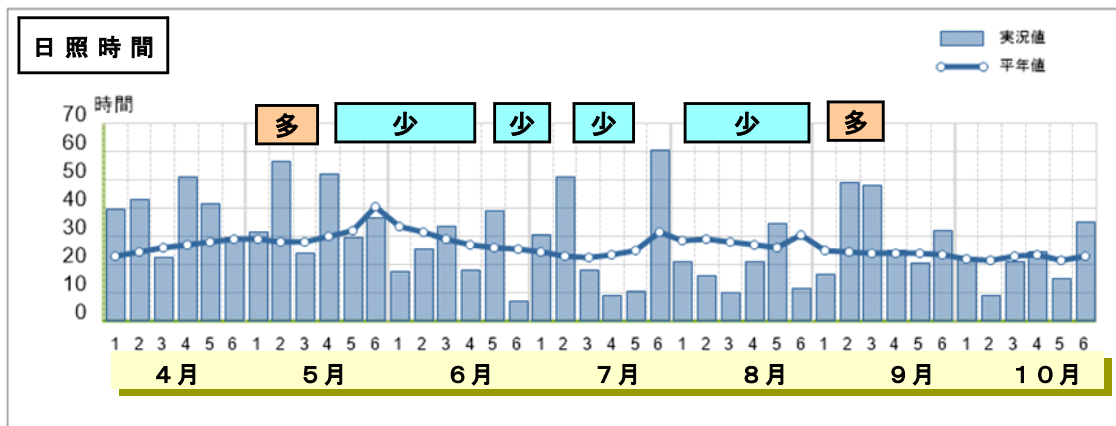
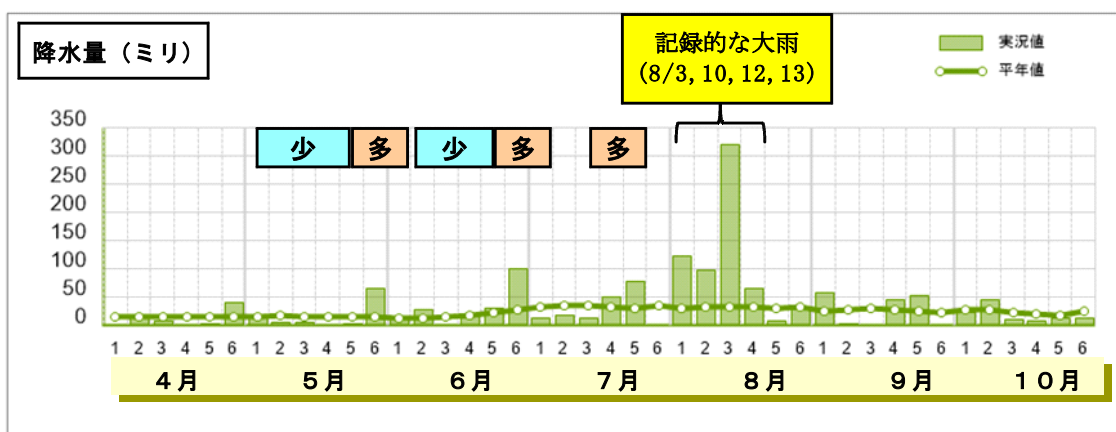
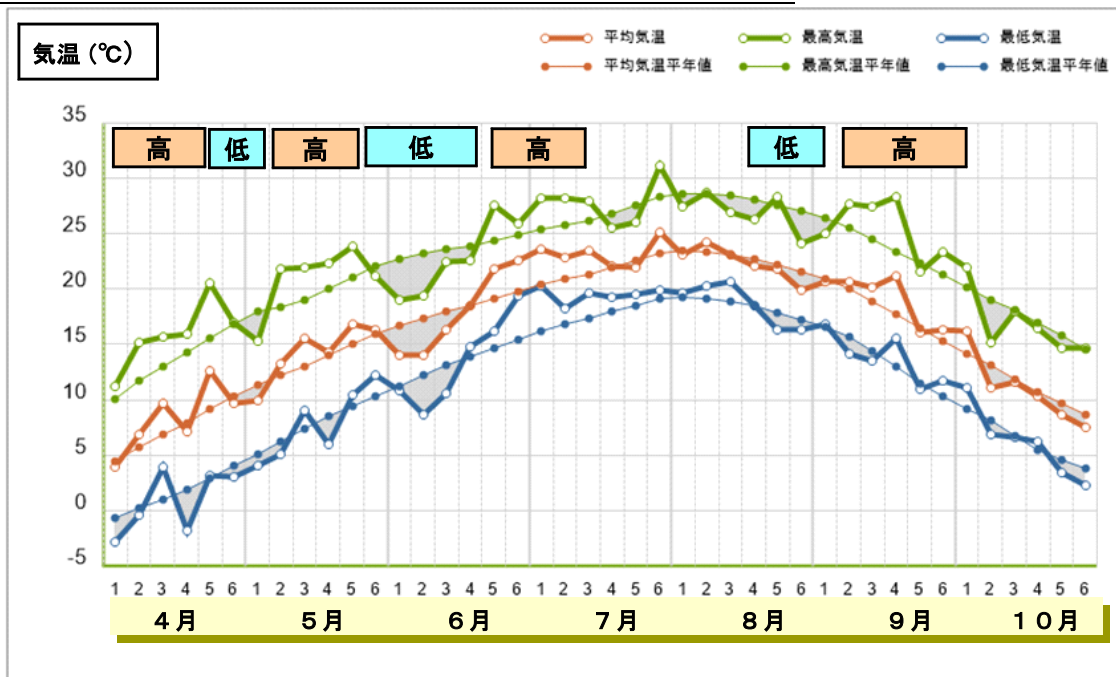


【作柄】m²当たり着粒数平年比90%、精玄米重は平年比96%

I 本年の気象経過（アメダス鹿角より）



Ⅱ 生育の概要（水稻定点調査より）

1) 育苗期

管内の播種盛期は、平年並の4月20日でした。4月中下旬頃にかけて、平均気温が平年より高く経過したことや、日気温較差が大きくなったことで、一部ハウスでは高温による葉先焼けや、病害の発生が見られました。

このような天候のため、苗の生育は平年よりやや早まりましたが、生育は概ね順調でした。

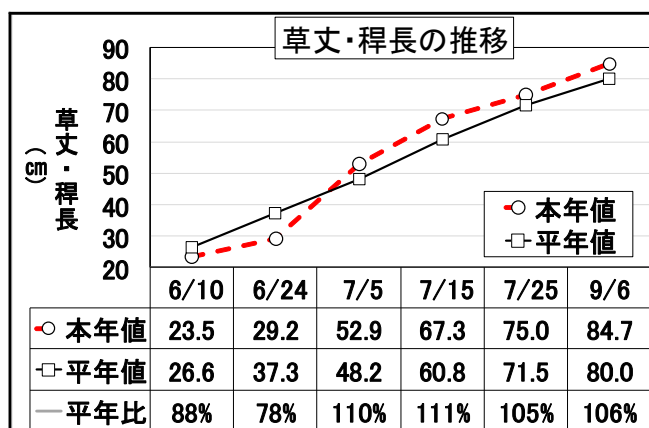
2) 生育期

①草丈・稈長

～7月以降は平年より長く推移、倒伏は平年よりやや少ない～

○ 草丈は、6月24日頃まで平年より短く推移しました。6月6半旬や、7月3半旬から5半旬にかけて曇天の傾向が続いたことから、7月以降は平年より長く推移し、最終的な稈長も平年比106%と長くなりました。

○ また、全体的に稈長が長い傾向であるため、8月末以降、倒伏の発生がみられました。



②茎数・穂数

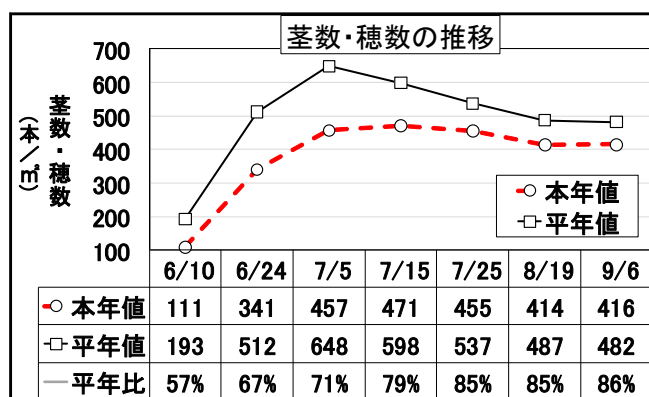
～生育期間を通して茎数・穂数ともに平年より少ない～

○ 田植え作業の始期である5月15日以降、田植え後10日間の平均気温は中苗移植の適温とされる14℃以上で経過しており、田植え後の苗の活着は概ね良好であったと見られます。

○ しかし、5月27日から6月7日にかけて、低温少照で経過したことで、初期生育は緩慢となり、分げつの発生が抑制されました。

○ また、6月27日から7月2日においては、日気温較差が小さく、概ね少照で経過したため、分げつの発生は抑制され、以降は生育期間を通して平年を下回る茎数で推移しました。

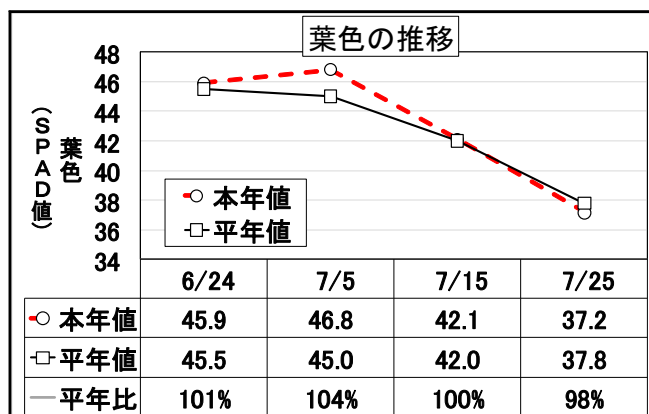
○ また、最終的な穂数も平年比86%と少なくなりました。



③葉色

～7月5日以降、葉色低下～

○ 葉色は、7月5日まで平年より濃く経過したもの、幼穂形成期（7月15日頃）から減数分裂期（7月25日頃）にかけては、平年並～やや淡い状況となりました。



④葉数

～出穂盛期は平年並であるものの、一部ほ場で出穂遅れる～

○ 葉数は、5月27日から6月7日にかけて低温で経過したため、6月24日頃まで平年より少なくなりましたが、7月に入り、気温が平年並～高く推移したため、7月5日以降は葉数の展開が進みました。

○ また、本年の出穂盛期は、平年並の8月4日でしたが、管内の一部のほ場については、出穂の遅れが見られていました。

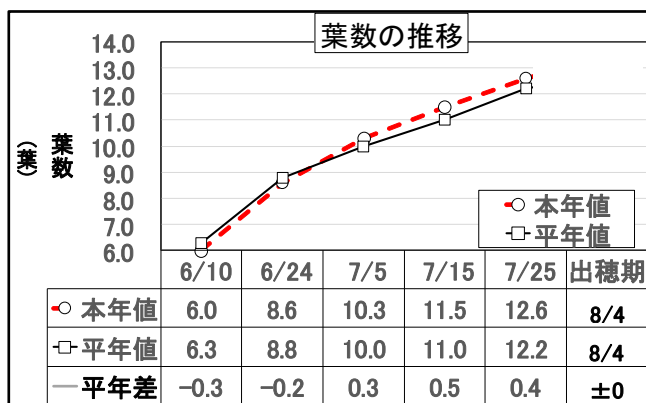


表1 水稻定点調査結果（成熟期 「あきたこまち」）

	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m ²)	有効茎歩合 (%)	倒伏 程度
本年値	84.7	17.4	416	88.1	0.2
平年値	80.0	17.1	482	74.4	0.5
平年比	106%	102%	86%	13.7	-0.3

Ⅲ 収量構成要素

	穂数 (本/m ²)	1穂粒数 (粒)	m ² 当たり粒数 (粒)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)	玄米重 (kg/10a)
本年値	416	69.2	28,648	88.4	22.9	564
平年値	484	66.2	31,941	84.7	22.5	585
前年値	503	64.0	32,199	84.8	23.2	614
平年比(% ±)	86%	105%	90%	104%	102%	96%
前年比(% ±)	83%	108%	89%	104%	99%	92%

表2 水稻定点 分解調査及び収量調査調査結果（「あきたこまち」）

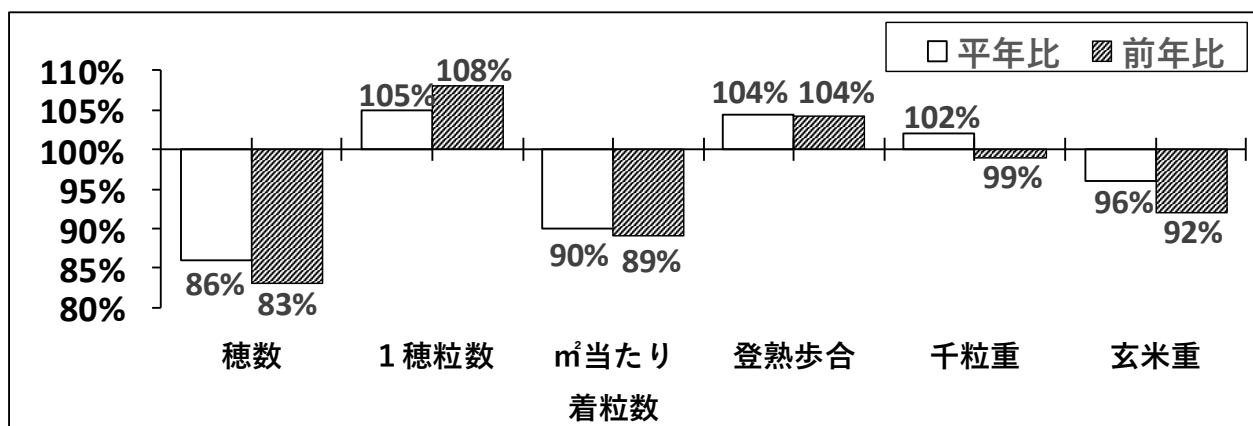
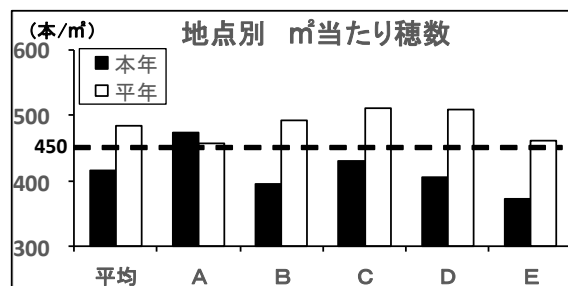


図 水稻定点調査 収量構成要素 平年比及び前年比

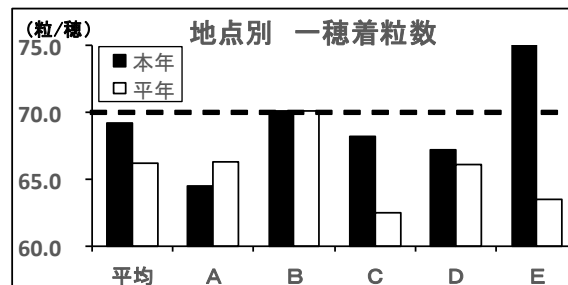
1) 穂数 ～少ない～

- 5月27日から6月7日にかけて低温少照で経過したことにより、稲の初期生育が緩慢となったことや、6月27日から7月2日にかけて日気温較差が小さく、概ね少照で経過したことで、分けつの発生が抑制され、茎数が平年を大きく下回ったことが影響し、最終的な穂数もまた平年比86%と少なくなりました。
- また、ほとんどの地点で平年を下回る穂数となりましたが、有効茎歩合が高く、後半まで穂数が確保されていたA地点では、平年を上回る穂数となりました。



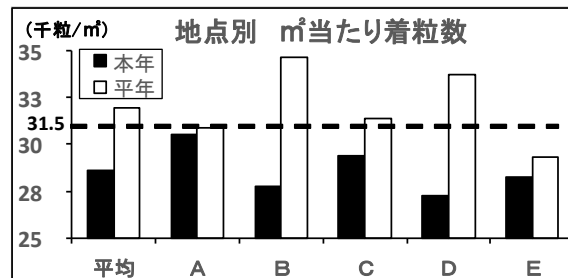
2) 一穂着粒数 ～多い～

- 穂数がかなり少ないことや、幼穂形成期から減数分裂期にかけて葉色が概ね維持されていたことから、一穂着粒数は平年比105%と多くなりました。
- また、ほとんどの地点で平年を上回る一穂着粒数となりましたが、穂数が平年を上回っていたA地点では、平年をやや下回りました。



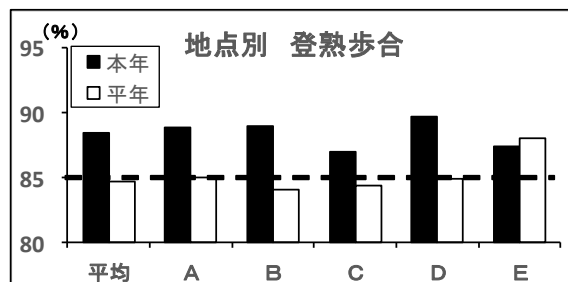
3) m²当たり着粒数 (穂数 × 一穂着粒数) ～少ない～

- 一穂着粒数は多いものの、穂数は平年を大きく下回ったことから、m²当たり着粒数は平年比90%となりました。
- また、平年を上回る穂数となったA地点では、一穂着粒数が平年を下回ったことで、m²当たり着粒数が平年を下回りました。



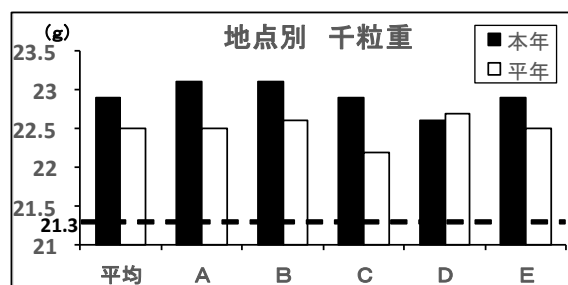
4) 登熟歩合 ～やや高い～

- 8月1半旬から9月1半旬まで、日照時間が少なく経過したため、出穂後の登熟は緩慢になったと考えられます。
- 登熟歩合は平年比104%とやや高まりましたが、枝梗別の登熟歩合には差が見られていました(登熟歩合 1次枝梗糲 92.4%、2次枝梗糲 81.1%)。



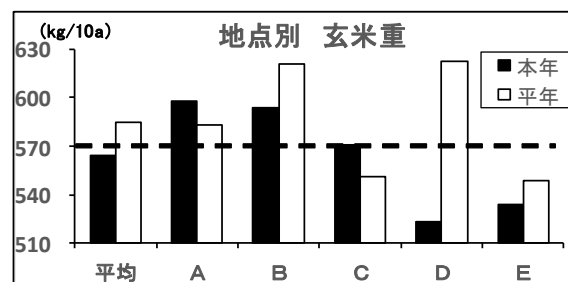
5) 千粒重 ～やや高い～

- 登熟歩合が平年よりも高くなったことで、千粒重もやや高まりました。



6) 玄米重 ～少ない～

- m²当たり着粒数の不足が影響し、玄米重は平年比96%と少なくなりました。
- また、玄米重が管内の平均値を下回った地点では、極端な穂数不足や、登熟歩合の低下が見られていました。



※ 地点毎の平年値は過去10カ年平均
※ 破線は県北の目標値

Ⅳ 米の等級検査結果 ～ 1等比率95.2%（11月末現在）～

11月末現在のＪＡの等級検査では、1等米比率（水稻うるち玄米全品種）は95.2%となりました。

また、等級格下げの主な原因としては、斑点米カメムシ類による着色粒が52.5%と半数を占めました。

Ⅴ 病害虫の発生状況

1) いもち病

管内では平年並～やや多い発生でした。

2) 紋枯病

前年に紋枯病が発生していたほ場で、病斑の上昇が目立ちました。

3) 斑点米カメムシ類

病害虫防除所から、8月9日に注意報第2号が発表され、発生は多くなりました。

特に、水田内雑草（ノビエ、ホタルイ類等）が発生しているほ場で発生が多く確認されており、このようなほ場では斑点米による品質低下が拡大したとみられます。

Ⅵ 次年度に向けて

1) 基本技術の励行による収量・品質の確保

令和4年は、初期生育の停滞に伴う茎数不足の影響で穂数を確保できなかったことが、減収の一因となりました。安定した収量・品質を確保するため、初期生育確保のための基本技術について、今一度見直しましょう。

① 苗の種類や育苗様式に応じた適正な育苗管理の実施

○箱当たりの播種量に適した育苗日数として、健苗育成に努めましょう。

○稚苗は180g/箱播きで育苗日数は20～25日、中苗は100g/箱播きで育苗日数は35～40日とします。

② 適期の田植えと栽植密度の確保

○穂数を安定して確保するためには、栽植密度は70株/坪を基本として、適正な植付株数での作付けを行うことが重要です。

○田植えは、日平均気温で稚苗で13℃、中苗14℃以上の日とし、できれば日中の最高気温20℃以上の日に実施しましょう。田植え直後は水深を4cm程度とし、保温効果を高めるためできるだけ湛水状態を保ち、苗の活着を促しましょう。

③ 水管理による分けつの発生促進

○活着後は基本的に浅水管理とし、水温と地温を高めて日気温較差を大きくします。このため、できるだけかん水は水温の低い早朝に短時間で終えるようにし、日中は止め水とすることで、地温と水温の上昇を促進しましょう。

2) 雑草対策

【雑草防除のポイント】

◇一発処理除草剤

- ・一発剤の多くは、限界葉齢がノビエ2.5～3.0葉となっていますが、効果の安定のためには、ノビエ2.0葉期までの散布が望まれます。このため、一発剤は、代かきから10日以内の使用が効果的です。
- ・雑草は代かき後に発生し始めることから、代かきから田植えまでが長くなると散布適期の日数が短くなるので、作業は計画的に行いましょう。

◇中・後期除草剤

- ・一発剤の使用後、雑草が残った場合には、早めに中・後期剤の使用を検討しましょう。
- ・中・後期剤は、発生している雑草の種類を確認して選択しましょう。また、稲の葉齢及び雑草の葉齢を確認し、散布適期を逃さないようにしましょう。

3) 斑点米カメムシ類対策 ～多発が予想される場合は2回防除を！～

○本年も斑点米カメムシ類の発生がみられました。斑点米カメムシ類の発生を防止するため、水田内および畦畔等にカメムシ類が増殖しない環境を作ること（耕種的防除）、その上で、殺虫剤による適期の本田防除（薬剤による防除）を行うことが重要となります。

【耕種的防除】

◇農道・畦畔の草刈り

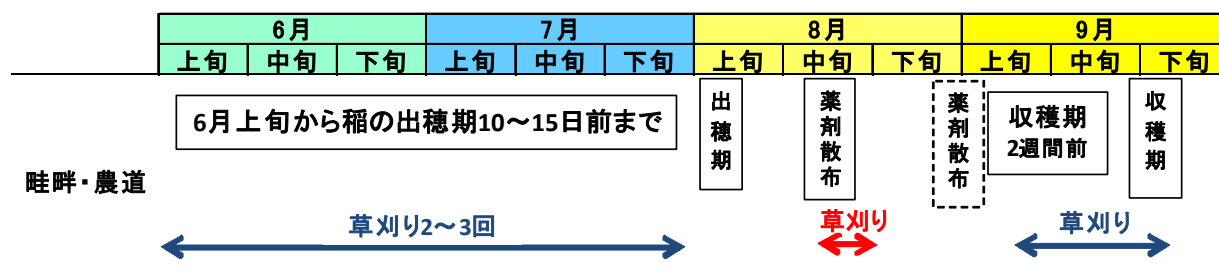
- ・ 6月上旬から稲が出穂する10～15日前まで数回行う。
- ・ 8月は、出穂後10日頃の薬剤散布後7日以内までに草刈りを行い、その後は収穫2週間前まで草刈りは行わない。

◇水田内雑草防除

- ・ 水田内の除草効果を高めるため、畦畔補修等の漏水対策や、代かきから除草剤散布までの日数を空けすぎないなど、適切な管理を行う。

【薬剤による防除】

- ・ 出穂後10日頃の防除（スタークル剤またはアルバリン剤）を徹底する。
- ・ カメムシ類の多発が予想される場合は、出穂後10日頃と24日頃の2階防除を実施し、薬剤抵抗性の発達を防止するため、2回目はキラップ剤またはエクシード剤を使用する。



◎ご質問は、J A かつの営農経済部（23-2497）か鹿角地域振興局農業振興普及課まで（23-3683）まで